国土交通省
道企 第1754号
19.5.31

竹総第 0507002 号
平成１９年５月７日

国土交通省　道路局長　殿

大分県竹田市長　牧　剛

道路特定財源についての思い

わが故郷竹田市は面積４７８平方キロの市域を擁する風光明媚なまちです。

管内には阿蘇・くじゅう国立公園、祖母・傾国定公園があり、ラムサール条約に登録された坊がつる湿原も我が市民の手で守られています。また日本有数の炭酸泉といわれる長湯温泉をはじめ数多くの温泉、雄大な久住高原、流麗な流れを呈する白水ダム、そして日本１００名城に選定された滝廉太郎・荒城の月の岡城も竹田市です。その素晴らしい竹田の人口が２６，０００人なのです。

さて戦前・戦後の混乱期に私どもは多くの疎開者を受け入れ、あるいは食料供給基地として国に多大な貢献をしてきました。昭和３０年代竹田市は豊（豊後）肥（肥後）商圏の中心地として大変な賑わいを見せていたのです。しかしながら戦後の国威高揚のためには東京や大阪など日本の中心都市の隆盛を図る必要があることから多くの人材を送りだしてきました。加えてモータリゼーションの発達により高速交通網が整備された海岸部に経済活動が集中し、人口の流出がはじまったのです。

風光明媚は裏返せば急峻な地形であってそのため市内のトンネルは７０箇所を超え、県道、市道とは名ばかりの道路も多く、昭和５７年、平成２年、平成５年そして行方不明者２名を出した一昨年の台風時には孤立する集落が続出しました。

高齢化率が４０パーセントを超えるのは後何日だろう。そのような地域で農林畜産業に奮闘しています。わが市の振興は観光と農業を抜きにしては考えられないのです。農産物にはその品質・食味に絶対の自信を持っています。また観光資源もその豊富さは日本一と自負しています。しかしながらそれを都市の台所に運ぶ、また多くの人々を引き寄せる社会資本の整備が遅れているのです。

今私たちは県境を越えた阿蘇市や高千穂町等と連携を図り、活力を蓄えて取り残された九州内陸部から声を高く訴えていこうとしています。そのためにも道路網の整備は欠かせないのであります。

日本の隆盛はまず都市部の整備からとの考えに私たちは賛同し、エールを送

ってきました。そしてその整備がほぼ完了し、いよいよ、いな、やっと地方の番だと心待ちにしていたのです。

このような折に喧しく湧き出してきたのが、整備が済んだ都市部からの過疎地道路不要論です。そして追い討ちをかけるように議論され始めたのが整備目的で設けられた道路特定財源の一般財源化なのです。これは到底容認できるものではありません。

先日九経調から２０３０年には竹田市の人口が半減するとの報告が新聞紙上に掲載され市民は大変動揺しています。過疎・高齢化は待ったなしです。これを少しでも回避し、市民に豊かさと充実感、生きることの喜びを抱いていただくためにはより多くの交流人口を呼び寄せ、手塩をかけて作る農産物を買っていただく、また都市に新鮮さを届ける、そして急病の折には医療機関の整った都市にすぐ行ける，そんな道路が必要なのです。

政府は真に必要な道路は特定財源を充当して整備を進めると言っています。しかしながら真に必要な道路は何をもって判断されるのでしょうか。過疎地における交通量は都市部におけるそれと到底太刀打ちできるものではありません。私たちにはこのすばらしい地域を後世に引き継ぐための道路が真に必要な道路なのです。

今私たちが尤も期待しているのが地域高規格道路の中九州横断道路です。大分県と熊本県の県境を守る竹田市そして阿蘇市にとって産業経済を活性化し、昔の賑わいを再び取り戻せる軸なのです。そしてその早期整備は東九州自動車道の整備と相俟って、九州はひとつの掛け声のもとに九州府の設立を目指すネットワーク形成の鍵となるものであり必要不可欠であります。

もとより私どもは管内の道路について全てを対象にするものではありません。現状のままでよいもの、１．５車線改良でよいもの、歩道を設置しないものなど必要に応じて判断し、又今日まで整備された路線については適宜適切な維持・管理をしていきます。

こうした観点からの真に必要な道路であります。そしてそのために必要なのが目的税である道路特定財源であります。

平成２０年の国民体育大会ではわが市でソフトボールの成年男子、女子、少年女子またラグビーの成年男子、山岳のリード、ボルダリングが行われますが訪れいただく方全員に竹田の素晴らしさに感動してほしいと念ずるものであります。